「キリストのピースメーカー」

アモス書５：２１－２４

August.14.2022

アモス書５：２１－２４（パワポ）

Preface

土浦めぐみ教会が所属しています日本同盟基督教団には、「教会と国家」委員会という委員会がありまして、毎年８月１５日の敗戦記念日前後には、この「教会と国家」委員会主催の平和祈祷会という共に平和を祈る祈祷会が持たれています。

今年も８月１１日に持たれました。

また、その祈祷会に参加がかなわない方々のために、祈祷課題を分かち合われたりもしているのですが、これまで分かち合われた祈祷課題にこのような祈祷課題があります。

（パワポ）

１，私たちの教団が、過去に犯した偶像礼拝と侵略戦争への加担、という罪を心に刻み、二度とその罪を繰り返すことがないように。また、私たちの国が侵略し、蹂躙し、偶像礼拝を強要した国々の方々に対して心からの和解を求めて行けるように。

２，福音主義に立つキリスト教会として、伝道と社会的政治的参与をキリスト者のつとめとし、この世にあって積極的に社会的責任を果たせるように。

３，この国の為政者が、公義と正義に基づく政治を行えるように。そして、主権在民、基本的人権の尊重、平和主義の原則を交代させる憲法改正発議がなされないように。仮に、憲法が変わろうとも、私たちが堅く信仰に立ち続けることを今から決意できるように。

４，「日の丸・君が代」強制問題で戦っている方々の信仰の自由が守られ、在日の方々や外国籍の方々を、私たちの隣人として自分自身のように愛し、基地の押し付けに苦しむ沖縄の方々の痛みに寄り添えるように。

５，８月６日広島原爆の日、８月９日長崎原爆の日を覚えて。そして、福島第一原発事故で被災された方々のために。２０１７年７月７日に国連会議で採択された核兵器禁止条約に、日本も参加することができるように。

６，私たちが、国家に対して「見張り人」として立てられていることを自覚し、主に代わって国家に警告を与え続け、神の国の拡大のために、私たちに与えられた宣教の使命を果たして行くことができるように。

第二次世界大戦後７７年が経ちましたが、その７７年の間、世界を見ますと、「果たして戦後と言えるのか？」というような状況が続いています。

私たち個々人のレベルから国家や民族のレベルに至るまで、また、武器を持たない利害、対立、競争という戦争に至るまで、一度たりとも争いが止んだためしがありません。

このことは、私たち誰もが知る周知の事実ですが、今読みました祈祷課題は、そのような一般的な戦争観とは一線を画す内容になっていることに、お気づきになるかと思います。

日本のクリスチャンとして決して忘れてはならない、また隠してもならない、教会が戦中に犯した偶像崇拝に対する反省に基づいた、信仰的な問題に関する祈祷課題となっています。

Part One

同盟教団発行の「世の光」第７８２号（２０１５年発行）で、赤羽聖書教会の野寺博文先生が、戦後の日本のキリスト教会についてこのようにおっしゃっていたことがありました。

「敗戦後７０年間の日本の教会の足跡は、罪の裁きの下にあり、神様は日本の教会にリバイバルをお赦しにならなかった。なぜならば、日本の教会は大日本帝国時代、偶像崇拝と戦争協力の罪を犯し、敗戦後も悔い改めがなされることもなく、多くの時間が過ぎてしまったからである。それゆえに、イスラエル・ユダヤ民族と同様に、日本の教会は捕囚の民としてリバイバルを経験できなかった戦後７０年を過ごしてきた。」

戦中、日本のキリスト教会は、天皇崇拝は宗教ではないという天皇崇拝の非宗教化を宣言しただけでなく、神社参拝も偶像崇拝ではないと国民儀礼として規定し、受け入れていきました。

日曜日の主日礼拝においては、天皇を褒めたたえる君が代を斉唱し、天皇に対する忠誠を表す皇居の方向に向いて宮城遥拝を行ったり、また、申命記やヨシュア記の聖書の言葉を引用しながら、朝鮮伝道論と銘打って、「朝鮮半島は神様が日本に下さった約束の地であるがために、その地を手に入れるために力を尽くし、大日本帝国政府に協力することは神様の御旨を成すことであり、地堺を広げて下さる絶好の機会である」と主張しながら、日本の教会は朝鮮半島に牧師を派遣して、朝鮮半島のクリスチャンたちに天皇崇拝と神社参拝を説得し、強要することを牧師たち自ら進んで主導しました。

正に、暴虐無動な不義に満ちた信仰的状態でありました。

無論、そんな中にあっても、ピューリタン信仰に立脚した信仰共同体である美濃ミッションや上智大学の学生や志しある少数の牧師やクリスチャンによる神社参拝拒否という信仰的反旗を翻した方々もおられましたが、天皇崇拝や神社参拝が聖書の教えに反していないどころか、聖書の教えに従った信仰的行為で

あると、ほぼすべてのキリスト教会が受容していきました。
　もちろん、そうせざるを得なかったという私たち誰もが持つ弱さや、その痛みや、そんな状況を生きなければならなかった当時の教会やクリスチャンたちに同情せずに、私たち自身のことを棚に上げて、軽率に断罪などしてはならないということは重々承知しなければならないでしょう。

　ですが、それを踏まえてもなお、日本のキリスト教会が、戦中の国家政策に熱中し、霊的視野を自ら閉ざしていたという事を、日本の敗戦と共に露呈したという事実は、現代に生きる日本のクリスチャンとして、私事として受け止めて行かなければならない深刻な問題でしょう。

　ダニエル書の説教講解の時、ダニエルの祈りを見ていきましたが、ダニエルはこう祈りました。
　「私たちは罪ある者で不義をなし、悪を行って逆らい、あなたの命令と定めから外れました。」
　ダニエルは、「私たち」という風に、その場にいなかったにもかかわらず、あたかもその場に自分もいたかのように、信仰の先達たちの罪を我がものとして祈りましたが、そのダニエルの祈りは、私たちの祈りともならなければならないでしょう。

　戦後、各教団によって、戦中の過ちについての謝罪文などが作成されはしたものの、戦時中の教会の過ちを日本のキリスト教界全体の問題として認識し、悔い改めたとは言い難いというのが、実際のところだと思います。
　１０年程前でしょうか、民主党政権から自民党政権に戻った時、突如として教会のメールアドレスに、天皇崇拝や神社参拝の正当性を訴えるクリスチャンの方々からの定期便メールのようなものが届き始めたことがあり、ショック受けたことを覚えております。

　先程の野寺先生は、他の著書でこんな風にも仰っています。
　「最近特に思うことは、日本のキリスト教会が今日、天皇制の呪いの束縛からどれほどに克服しているかということである。今時、どれほどの牧師が、天皇制の持つ問題をはっきりと講壇から説教出来ているだろうか。日の丸・君が代問題の深刻性を、牧師はまともに信徒に教えているだろうか。役員や信徒たちの反対を恐れて真理を説教することが出来ずにいるのではないだろうか。白黒はっきりさせることのない説教しか出来ていないのではないか。戦時中、一度敗北した日本の教会は、現在に至るまで世の中と摩擦を起こさないために、迫害を受けないために、かろうじて何とか延命している負け犬根性が、未だに抜けきっていないのではないだろうか。
　このような体質を根本から変えなければ、教会は戦後１００年過ぎても、世の中にキリストの栄光を表すことは出来ないだろう。世の中は急激に右傾化している。このような時代に真理を語るならば、当然厳しい迫害を受けるだろうし、

人間扱いを受けないこともあるだろうし、死ぬかもしれないということを覚悟持たなければならないだろう。だからと言って、世の中に迎合することは、戦時中の教会と同じことを反復してしまうだろう。悪しき時代であるがために、なおいっそう教会は、世の常識や評判に揺るがされるのではなく、神の国について語っている聖書から、世の状態を正確に判断しなければならない。」

この野寺先生の言葉に対して思われることは色々とあると思いますが、私は、野寺先生の仰る通りだと思っております。

Part Two

冒頭にアモス書５章の御言葉を読みましたが、アモス書の時代的背景は、大日本帝国下の日本と日本のキリスト教会に類似している点が多々見られます。

アモスが神の言葉を語る預言者として活動した紀元前７９０年ごろのイスラエルには、政治的強者が存在し、政治的弱者が存在しました。

なので、それに伴う激しい貧富の差があり、当然甚だしい差別もありました。その貧富の差と差別は、アモス書２：６にありますように、履き物一足で人を売り買いするような人を人とも思わない、神の律法が全くもって行われていないような神の民の国らしからぬ状態でした。

また、イスラエル王国は、国際情勢の隙をついて領土拡大に突進していました。

時の王ヤロブアム２世の指揮下、ヨルダン川東側の領土を掌握したことは、アラビア半島からダマスコまで往来する国際交易の利権を得るのに大きな意味を持ちました。

大日本帝国時代の日本も、アジア諸国に対して侵略戦争を起こしましたが、特に中国を傘下に治めることを通してその権力を世界に知らしめ、豊富な地下資源と大きな領土を手に入れるために、まず朝鮮半島を属国化するのが必須でした。

そして、無謀で残忍な戦略をもって一定期間アジア諸国の植民地化は達成しましたが、その根幹をなしていた思想や世界観が、神と人を愛するためのものでなかったために、当然のように、失敗と敗北をもって幕を閉じました。

アモスの時代のイスラエル王国も、その土台を成している考え方が、至って人間的欲望に倣ったものであったため、国の滅亡という悲劇を招き入れる結果を生みました。

領土を広げ、利権を手にしたは良いものの、その利権を享受することが出来たのは、大日本帝国もイスラエル王国も一部の社会的、政治的上層階級に属する者たちだけで、大部分は貧困に喘ぐような社会的状況でした。

また何よりも、そのような国家の状態と社会の状態の見張り役、または、世の光・地の塩の役割を果たさなければならなかった信仰者としてのイスラエル民族や信仰を神の御言葉に従って導いて行かなければならない祭司たちは、空虚

な形式的な宗教行為をもって、「信仰だ」としていました。
　まことの神様の求める教えと定めを拒否し、心を砕きつつ神の前に立つことを否み、異教の偶像崇拝と混ぜ合わせた混合主義的、または異教徒的宗教行為に陥っていただけでなく、王を神格化するという「まことの神を信じている」と告白する者たちにはあってはならない行為にどっぷりと浸かっていました。

　ヤロブアム２世の統治下にある政治、軍事、経済の見せかけの力を誇示している社会状況に、信仰者、そして教会自ら進んで巻き込まれて行き、霊的視野を閉ざしていきました。
　ついには、虚勢と空威張りとこけおどしに満ちた雰囲気に飲み込まれ、「暴虐と強奪渦巻く社会的状況が不義である」とクリスチャンとして訴えることもなく、認識することもしませんでした。

　そんな自称神の民、自称クリスチャンたちの礼拝と名乗る集会について、神様が嫌悪感を抱きながら、イスラエルの民たちに語った言葉が今日の聖書箇所です。
　もう一度お読みいたします。

　アモス書５：２１－２４（パワポ）

　神様のイスラエル民族に対する嫌悪感・裏切られ感に満ちた社会状況の中にあって、貧困層の中から登場してきた預言者が、一介の羊飼いアモスでありました。
　そして彼は、社会的不義と宗教的信仰的堕落を真っすぐに語りました。
　戦中の日本にも、先程話しましたように、少数ではあったものの、間違いを指摘し、反論して、迫害に合う人たちがいました。
　しかし、イスラエルも日本も、その正しいことばを受け入れることもなく結局終わりました。

　当時のイスラエルで、まともに神の言葉を語ろうとする者たちに、信仰者と自称する霊的視野を閉ざした者たちが、どのように彼らまともに神の言葉を語ろうとする者たちをやり込めて行ったかと言いますと、

　アモス書２：１２（パワポ）

　主にその身を献げ献身したために、強い酒や葡萄酒どころか、干し葡萄や葡萄の実さえも口にしなかったナジル人と言われる献身者に酒を飲ませて堕落させ、神の言葉を語る預言者には、「まともに神の言葉を語ってくれるな！」と迫害をしました。
　そして、その結果、
　アモス書８：１１（パワポ）

主の言葉がまともに語られることのない神の言葉に飢え渇く時代が来てしまい、魂の救いも、天の御国に行くという幸いも、神の言葉によって霊が生き生きと生まれ変わって、この地上での歩みを神からの使命に従って生きていくということが出来ない時が来てしまったのが、アモス書の時代のイスラエルであり、戦中の日本の教会であり、また、戦後の日本の教会はどうだったでしょうか。

Part Three

教会の中に御言葉が生きていますか？
御言葉を真っすぐに語る牧師がいますか？
御言葉を慕い求めるキリスト者がいますか？
自らを罪人だと公言し、でもそれ以上にキリストの贖いによって罪許された幸いな者だと公言し、罪赦された者として社会で、会社で、学校で、家庭で、虚勢と空威張りとこけおどしに巻き込まれることを拒み、世の光として、地の塩として生きようと命を懸けているキリスト者がいますか？

そして、一般論的な、ヒューマニズム的な、人本主義的な、経済・科学至上主義的な平和ではなく、キリストにある平和をつくる、つくろうとしているキリスト者がいますか？
イエス様は、平和についてこう仰います。

マタイの福音書１０：２７－４２（パワポ）

神の言葉を真っすぐに語る預言者として、自分の十字架を負ってイエス・キリストの弟子として生きる者たちを、神様が見捨てることは決してありません。
そして、ヒューマニズムを超えたキリストにある平和こそ、究極の平和であり、そのキリストにある平和をつくろうとする者たちには、必ずや迫害が伴うでしょう。

でも、ご安心ください。
イエス様は、キリストにある平和をつくる者として生きるならば、その先に必ずや、人間愛的な、ヒューマニズム的な平和もお与えくださると、約束して下さっています。

マルコの福音書１０：２９－３０（パワポ）

キリストにある平和をつくろうとする者たちには、またキリストにある平和をつくるよう神様から促され、その導きのなか、苦難と迫害に耐えるならば、１００倍にして家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を受けるとイエス様、約束して下さいました。
どこかの何だか怪しい教えを説いて、変な宗教に勧誘しようとしているわけではありません。

イエス様の約束について話しています。
イエス様を信じると自覚している人たちの覚悟についての話をしています。

例えば、ヨブ記を考えてみてください。
ヨブには覚悟がありました。
そして、イエス様の仰る御言葉通りをヨブは生き、体現し、その約束を経験しました。
ヨブ記をよーく見てみますと、ヨブの苦難の中語る悲痛のうめき、嘆き、不平不満の言葉は、そのすべてが人に対する訴えではなく、神を信頼しているが故の神に対する訴えとなっています。

ヨブは、最後の最後まで、迫害と苦難の中、神の内にあるキリストの内にある平和を求め、平和を体現し、平和を経験しました。
人生上手くいったという人間的な条件を満たした偽りの平和ではなく、有ろうが無かろうが、持とうが持つまいが、誰も取り去ることの出来ない神にある平和を経験しました。

では、戦後、経済発展に命を懸けてきた日本という国に、今、平和がありますか？
何度も言ってきましたが、自殺者数３万人のこの国に平和はありますか？
若者を搾取して成り立っているというこの国に平和はありますか？
老後に不安を覚え、実際に老後を生きているたくさんの人々がいるこの国に平和はありますか？
この国に生まれてきたたくさんの子供たちに平和はありますか？

そして何よりも、戦後、それでも神様の恵みの内に導かれ、歩みを進め、ここまで来た日本の教会の中にキリストの平和はありますか？
その平和を隠れることもなく、隠すこともなく、真っすぐに語り、真っすぐに体現し、真っすぐに生きようと、誰よりもキリストを愛することこそ平和であるという事を知っているキリスト者はいるでしょうか？
もちろん、いるでしょう。

じゃ、私たちは、そんなキリスト者として生きることが出来ているでしょうか？
本当にキリストに出会ったでしょうか？
本当にイエス・キリストが、すべてでしょうか？
本当にイエス・キリストが理由で、目的で、根源で、人生のすべてだと言わしめてしまうほどのイエス・キリストとの出会いがあったでしょうか？
出会いがあったならば、キリストのピースメーカーとして生きたいと、キリストの平和をつくる者として生きたいという欲望がお有りでしょうか？

Part Four

戦中の日本の教会は、国民儀礼を励行する“日本式教会”が、“世界に素晴らしく認められる日、興る日”が来ることを信じて期待しました。

その曲がった世に埋没した平和と、キリストにある平和をごちゃ混ぜにした何だかよく分からない邪悪な平和を結果的に期待してしまいました。

でも実のところ、その複雑な入り乱れた感情はよく分かりません。
何とかそのような困難な状況を切り抜けようと、本当はそうではないのに、そうであるかのようになふりをして、やり過ごそうとして、やり過ごせた時には、まともな信仰姿勢に帰ろうとしたのかどうか、そのような思いがあったのかどうかはよく分かりません。

もしあったとすれば、一抹の同情も出来たでしょうか？
でも、もしそんな思いがあったとしても、公に、公的に、人々の前で「主イエスを知らない」と言った、キリストにある平和を拒んだ事実は変わりません。

このひと事ではない事実を前にして、イエス様はどのように私たちに接して下さっているかと言いますと、それでもイエス様は私たちのことを見捨てるなんてことは決してせず、「あなたはわたしを愛しているか？」と語り掛けて下さいます。

３度イエス様を知らないと否んだペテロに、「あなたはわたしを愛していますか？」と３度お聞きになりました。
この言葉は、ペテロを責めている言葉でなく、ペテロに対する愛の告白です。
「あなたはわたしを３度拒んだけれども、わたしはあなたを赦しているし、あなたを愛している」というイエス様のペテロに対する「ねえ、僕のこと好きでしょ？」という愛情たっぷりの愛の語り掛けです。

ある意味、２５年前、お付き合いする前の家内が私に突然、「ねえ、あなた、私のこと好きでしょ？」と言った、自分が私のことを好きだと直接言うのが恥ずかしいから言った言葉とちょっと似てるなあと思わされます。

Conclusion

今も、イエス様は、私たち一人一人に、私たちの目を見て、同じ言葉をかけ続けて下さっています。
「あなたはわたしを愛していますか？」、「あなたはわたしを愛していますか？」、「あなたはわたしを愛していますか？」とです。

では皆さん、このイエス様の愛の語り掛けにどう答えますか？
このイエス様の愛の語り掛けゆえに、今の日本の教会があり、私たちがクリス

チャンをやってられ、それでもキリストの平和の中に入れられていることを覚えたいと思います。

天皇の勝利を主なる神様の勝利だと錯覚させてしまう闇の権威を持つ者たちの悪どい力と、時代が作り出す強い流れという力に巻き込まれてしまっているかもしれないという緊張感を持って、
また、果たして現代に生きる私たちは、この世の世界観に翻弄されているという事をどれ程に理解し、どれほどに誠実に聖書の教えに従って対処できているだろうかと聖なる不安も持ちつつも、それを打ち破ってくださるキリストを信頼していきたいと思います。

そして、この世界にあって、キリストのピースメーカーでありたいと願います。

お祈りいたします。
祝祷：マタイの福音書１０：３２